

本格操業に向けた拡大操業

目標管理の通じない生業に目を

数字に汚されない生きがいも

### 入れ替わる魚種

およそ4年前に福島県浜通りの新地町へ移り住み、漁師さんの手伝いを始めてからも、海は毎年、大きな変化を繰り返している。震災前には水揚げ量が多かった魚種が姿を消し、それほど目に触れることのなかった魚が大漁をしている。2018年までは浜を賑わせていたコウナゴが、翌年からはびたりと見えなくなった。震災前の新地の釣師浜港では、コウナゴ・メロウド・シラスなどの、いわゆる「曳きもの」（船曳き網漁）で、年間の過半数の水揚げ高を維持していたので、大きな打撃である。代わりに増えてきたのは「回りもの」と呼ばれる回遊魚、サワラ・タチウオなどであり、ときにはイセエビが刺し網にかかってくる。総じて、主に西南日本の沿海を移動していた生物が北の海へと流れてきた印象である。市場に出す魚ではなく、「シタモノ」と呼ばれる生物たちにも変化がある。今年は、震災後に少なくなったヤドカリが、再び刺し網に多くかかり始めた。漁師さんたちが「シタがあれば魚がかかる」「シタがないので一匹もかからない」と語っているように、ヤドカリ、ヒトデ、さらにムシ（ヨコエビ）やツブ貝に食われた魚までも含んだシタモノがいる海底ほど、魚もいることを認識している。目標とする魚だけが純粋に捕れるわけではないことは、漁業の実態を知る第一歩である。これを知らないと、**市場に揚がった魚種とその漁獲量・漁獲高の年間の一覧表を眺めるだけで漁業を論じるという、大きな錯誤に陥るからである。**



刺し網には、市場に出さないコロザメなどがかかってくる（2021年8月、筆者撮影）



オカに上げた網からシタモノをはずす（2021年9月、同）



刺し網にかかったイセエビ（2020年8月、同）

## あの人たち」と呼ぶ

今年になって見えてきたヤドカリがかかる場所は、アカジカレイ（マガレイ）もかかる。ヤドカリが背負う貝殻にはゴカイが入っていることがあり、これを食べるアカジカレイがそのことを知っているからだ。漁師さんたちは語る。ヤドカリには動く道があり、「あの人たちも知っている」と、カレイのことを「あの人たち」と呼んでいる。魚を「あの人たち」と呼ぶことは、あくまで比喩に違いないのだが、魚自体にも意思があり、人間の力では手に負えないことも表現している。魚を「水産資源」とのみ捉え、人間が管理できるものとする考えとは、異質なものである。人間が魚を捕り尽くしてしまうことと、人間が魚を管理できるものとする考えとは、背中合わせの同じ発想である。少なくとも漁師さんにとって、海は毎年違うだけでなく、毎日違っている。魚の動きに合わせて一喜一憂しながらも、それゆえに生きがいを感じている。

## 自然の中の位置

福島の漁業は、2021年4月から、「試験操業」から本格操業（震災前の操業）へ向けての移行期間という意味で「拡大操業」という名称が変わった。しかし、呼称が変わっただけで、実質には変化がなく、極めて簡潔に述べれば、震災前の漁船ごとの操業日や水揚げ額のデータから机上の計算をして、月に何日かの操業日、一日の水揚げ額の1割を操業日ごとに達成しないと、その月の東電からの補償の対象にならないことが決められた。月の操業日は、およそ8~10日だが、これが水揚げ額の1割という条件とともに、意外に四苦八苦している状況である。なぜなら、漁にふさわしい天候が毎日、約束されているわけでもなく、たとえ漁に出たとしても、大漁もあれば不漁もあるのが、漁業の実態であるからである。ましてや、コウナゴが雲散霧消してしまった昨今の春を迎えては、震災前のデータから割り出された数値に届くまでが大変なのは目に見えている。海に行けば必ず魚が捕れると考えるのは、サラリーマンのような発想であり、海と魚という自然相手の生業には通じない考え方であった。数値目標を計算し、目標管理として掲げることは、最近流行の処世術である。新型コロナウイルスの対応から、原発事故後のトリチウム水の海洋放出に至るまで、「ステージ」とか「エビデンス」とかのカタカナの流行語を、さも分かったように回らぬ舌でしゃべり、自分たちが作った数字に支配される行動をしているのが、現代の貧しい人間たちである。現在、日本をはじめ各国が持続可能でより良い世界を目指す「SDGs」を国際目標として推進しているが、それも人間のみの心地よさを目指すものであれば、一種のイデオロギーに終わってしまうだろう。この世界には、生きるに値しない生物などではなく、そのことを一番よく知っているのが、逆に市場用の魚とほかの生物とを「選別」せざるを得ない漁師さんたちである。「シタモノが居るからこそ魚も居る」、数値に汚れた人間ではなく、地球と自然のなかのヒトの位置を感じることができるのも彼らであり、共に生活しながら学んだことは数知れない。

（日本民俗学会会長）

かわしま・しゅういち 1952年、宮城県生まれ。東北大学災害科学国際研究所シニア研究員。博士（文学）。専門は民俗学。著書に『漁撈伝承』『津波のまちに生きて』『「本読み」の民俗誌』『春を待つ海』などがある。